ゴットフリートの『トリスタン』

——タントリス・エピソードについて——

Gottfrieds »Tristan«

——Über Tantrisepisode——

斎　藤　芙美子

トリスタンは、モーロルト・エピソード（5867行から7230行）[1]において、モーロルトの毒を塗った剣により大腿に致命傷を負った。モーロルトが、「どんな医者も医術も、この苦しみから、お前を救うことはできない。わが妹、アイルランドの王妃であるイゾルデ唯一人が、それをすることができる」(6944-6947)[2]と断言したように、トリスタンの致命傷は、「見つけられる限りの、最高の医師たち」(7259)[3]によっても、治癒することはなかった。この致命傷が、モーロルトの妹で、アイルランドの王妃であるイゾルデの手によって治癒されるまでのエピソードが、タントリス・エピソード（7231行から8225行）である。

タントリス・エピソードはトリスタン伝説に従って語られるのではあるが、トリスタンとイゾルデの愛に関して、見落としてはならない問題が含まれているように思われる。

フルストナー（Hans Furstner）は、『ゴットフリートの叙事詩におけるトリスタンとイゾルデの愛の始まり』という論文で、「この上記の論議によってはっきりとさせたかったことは、媚薬（Minnetrank）を飲む前に、トリスタンとイゾルデに無意識の愛を想定する見解は、存立させるわけにはいかないということである。それは、ゴットフリートの意図とも、合致していないことは疑う余地もない」[4]という意見を発表した。にも拘らず、筆者は、媚薬を飲む以前の、二人の愛の芽生えが、フルストナーの取り上げなかったタントリス・エピソードの中に、暗示されているのではないかと考える。その理由を述べてみたい。

1

モーロルトによって、致命傷を負ったトリスタンは、「死が定めであるなら、命を賭して、死のうとも、或はこの死ぬほどの苦しみに耐えてみようとも、大して変りはなかろう」(7303-7306)[5] と考えて、アイルランドへ出発する決心を固める。

このトリスタンの決心は、伯父マルケ王にとって、「いいとも、悪いとも考えられた」(7317)[6] が、「トリスタンがアイルランドへ向かおうとしていることは、口外されてはならない。身体の治療のために、サレルノに行くという話にしておこう」(7327-7331)[7] という合意が、マルケ王とトリスタンの間に成立した。　こうしてトリスタンは、アイルランドへ向けて、師傅クルヴェナルと八人の舵手を伴い秘かに船出した。アイルランドへ近付いた時、トリスタンは積んできた小舟をおろし、ぼろ着をまとい、竪琴と少々の食物だけをもって、ただ一人身を横たえ、クルヴェナルや他の乗組員を帰国させた。

上記のような、アイルランド航行の筋書きは、アイルハルト[8] や、彼に依拠したベディエ[9] と比較すると明らかだが、トリスタン伝説が余りにもおとぎ話的であったのに対して、ゴットフリートが改作を行ったものであった。「モーロルトが、彼の敵にまだ治癒の見込みがあるという希望をもたせるという筋書きを考案したのはトマであった。この話の発端はただ首尾一貫させて展開される必要があるのだが、そうして出来上がったトマの本がゴットフリートの改作の中で、調和のとれた印象を与えるようになっている」[10] とオッケン (Lambertus Okken) は指摘している。

さて、トリスタンがただ一人身を横たえて漂っていた小舟は、アイルランドの首都、ダブリンの人々によって発見される。使いとしてやってきた「人々は舟に近付きながら、誰一人も見当らないと思ったとき、そこから妙なる、心にひびく、美しい竪琴の音が響き、その竪琴に合わせて、一人の男がまことに美しく歌うのが聞こえたので、人々はそれを挨拶とも、不思議とも思い、その男が竪琴を奏で、歌っている間は、その場を立ち去らなかった」(7513-7523)。[11]

こうして、「その妙なる、やさしい竪琴の演奏がアイルランドへの入国と、イゾルデのもとへの登場を実現させる」[12] ことになるのだが、グネディンガー (Louise Gnaedinger) は、『サーガ』(Tristrams Saga ok Ísondar)[13] には、小舟の中でのトリスタンの演奏のことは語られていないのだから、トマの場合にも水上での魅惑的な音楽の話はなかったのだろうと推測している。[14]

この海上での妙なる演奏の場は、恐らくゴットフリートの独創になるものであろう。では何故ゴットフリートは海上での演奏を設定したのであろうか。ダブリンからの使いの人々によって小舟が発見された上記の描写にひき続き、ゴットフリートは次のような音楽論

を展開しているが、ここにその理由が隠されているようにみえる。

「しかしながら、人々がその場でトリスタンから得た歓喜は、長くは続かなかった。というのも、彼が人々に手や口をつかって演奏したものは、心底から生まれてきたものではなかったのである。そこには心（herze）が伴っていなかった。心が伴わなければ、しばらくでも演奏はできないというのが、音楽の本然の姿である。しかしそういうことが非常によくおこるわけで、心（herze）と感情（muot）が伴わずに、ただ表面的に演奏するのでは、正しい演奏とは言えないのである」(7524-7536)。[15)]

上記の音楽論を展開することによって、この海上で瀕死のトリスタンが行った演奏は、「苦しみにさいなまされている人」(7541)[16)] のものであって、本来のトリスタンが創り出す音楽ではなかったことを、ゴットフリートは指摘している。

トリスタンの創り出す音楽の力は、ゴットフリートがすでにトリスタンの少年期において、最も力点をおいて、トリスタン少年の特性として語ったものであった。[17)]

そのトリスタンが創り出す音楽に、herze と muot が伴う時こそ、トリスタンの音楽だと言えるということを強調しようとして、海上での演奏の場が設定され、音楽論の展開となったと思われる。トリスタンの特性は、まさに音楽と心の一体化に象徴されていると言えよう。

2

では、トリスタンの演奏に心が伴った時、何が起こったのであろうか。

トリスタンはダブリンからの使いの人々に対して、「私は宮廷の楽士をしておりましたし、宮廷の礼儀作法や心得を十分に身に付けておりました」(7560-7562)[18)] という偽りの身の上話を語り始める。そして最後に「人々の住んでいる所へ、私を連れていって下さい」(7606)[19)] と、彼の本当の願いを吐露した。

この願いが叶えられたとき、シュペッケンバハ（Klaus Speckenbach）も指摘しているように、「人々が自称楽士を陸地へと連れてきた時に初めて、トリスタンは人々の好意を獲得しようと思って、その演奏に、herze が加わった」[20)] のである。シュペッケンバハは更に付け加えて、「音楽に Herz が関与するということは、明らかに聖書と教会の音楽理論によって示唆されたものである。……ただし、宗教的な意味は『トリスタン』にはすっかり落ちている」[21)] とも指摘している。

herze の関与を、ゴットフリートは次のように語る、「人々はトリスタンに竪琴を弾いてくれるように頼んだ。彼は全霊をかたむけて、彼らの依頼に応じた。というのも、彼は心から（von allem herzen）演奏した。手や口で人々に気に入ってもらえることができるなら、全く彼の望むところであり、そのため身を粉にして務めた。この哀れな楽士が、

その身体の具合にもかかわらず、竪琴と歌を余りにも甘美に奏で始めたとき、人々はみな同情し始めた」(7665-7677)[22] と。

トリスタンの「心から」(7668 von allem herzen) の音楽が、ダブリンの住人の同情をひき起こし、王妃イゾルデによる治療へ、更に王女イゾルデとの出会いへと連動していくように、ゴットフリートは構成していく。

つまり、「王妃の師であり、且つ従士でもある」(7708-7709)[23] 一人の僧によって、トリスタンの音楽が見出される。この僧は、「また、王妃の娘であり、世の全ての人にもてはやされ、この物語の主人公である比類ないイゾルデをも、長年にわたり気遣いして教えてきた。彼女は王妃の一人娘であり、王妃は、娘が手や口で音楽を学べるようになるや、娘の教育に全力を傾けた。彼はこの娘をもひき受けて、読書と弦楽演奏をいつも教えていた」(7715-7727)[24] のである。

ワーグナー (Wilfried Wagner)[25] も指摘しているように、ゴットフリートは、プロローグを除けば、7700行以上も過ぎたここに来て、初めて、この物語のもう一人の主人公である王女イゾルデについて、やっと語り始めた。

この僧の仲介によって、瀕死のトリスタンは、自らを「タントリス」(7787 Tantris) と名乗って、王妃たちの前で演奏することが可能になった。

「トリスタンの竪琴がとり寄せられた。直ちに若い王女も呼ばれた。愛 (minne) のまことの封印であったため、後には彼の心が封印されて、その唯一人の人を除いては、世の全ての人々に対して彼の心が閉ざされてしまうことになった、その美しいイゾルデ、彼女もまたそこへやってきて、トリスタンが竪琴を奏でるのを、熱心に聞き入った。彼も未だかってなかったほど、上手に竪琴をかきならした。彼は自分の不幸が終りそうだという望みを抱いたからで、彼は瀕死の人とは思えぬほど、彼女たちのために歌い且つ奏でた。生き生きとしてそれを行ったので、まるで元気な人がしているようであった。彼女たちのために、彼は手と口で余りにも見事にやってのけたので、たちまちのうちに、彼女たちの好意を獲得し、彼の幸運はひらけた」(7809-7832)。[26]

その幸運とは、この瀕死の楽士を兄の仇とはつゆ知らない王妃イゾルデが、彼の治療を引き受け、回復したならば、娘のイゾルデの教育係にしようと考えたことであった。

その治療については、ゴットフリートは次のように語る。「私が今あなた方に、いろいろと詳しくわが王妃の技について、その薬がどんなに不思議なよく効く力をもっていたかとか、王妃が患者をどのように扱ったかとか、物語ってみたところで何の役に立ち、どうなるというのであろうか。気高い人の耳には (in edelen ôren)、奇術の箱から (ûz der bühsen) 取り出す言葉よりも、美しく洗練された言葉の方が、ずっと快くひびく。私は気のつく限り、あなた方の耳ざわりとなり、気持に逆らうような言葉を、あなた方に語ることがあってはならないと思う。宮廷にふさわしくないような話し方で、物語を不愉快で

下品なものにするよりは、むしろその事柄については話さない方がよかろう。従ってわが王妃の医術や、王妃の患者の治療については、あなた方に手短に語ろう。王妃は二十日以内に彼を救い、彼がどこにいても、彼のそばにおろうと思う者が、誰もその悪臭ゆえに避けなくてよくなった」(7935-7961)。[27]

上記のゴットフリートの叙述には、クローン（Rüdiger Krohn）[28] も指摘しているように、修辞法としての省略法が用いられている。ゴットフリートは詳しく治療の様子を描写することを、意図的に避けている。クローンは、「彼のこの書き控えを誇示する態度は、恐らくヴォルフラム・フォン・エッシェンバハに向けられているのだろう」[29] と指摘している。

ゴットフリートはトリスタンの刀礼を語るに当たり、同時代の詩人たちに対して「文学批評」[30] を行った。その中で「奇術の箱から」(4671 ûz der bühsen) という同じ表現を用いて、香具師のような手法を用いるライバルとその追随者を非難し、「彼らの物語は、こころ気高い人（daz edele herze）が、それを聞いて微笑むというようなものではない」(4681-4682)[31] と断じた。あの場面を、ここ（7931-7961）でも聴衆が想起せざるをえないように、詩人は語っているのである。

このタントリス・エピソードを物語りながら、ゴットフリートの意識下には、「文学批評」で繰りひろげた彼の思いがまたはっきりと流れていたと言えるのではなかろうか。

3

音楽と心を一体化させることによって、幸運をきり開いたトリスタンは、ついに王女イゾルデの教育を担当することになった。「その時から若い王女はいつも彼の教えをうけることになった」(7962-7963)[32] という書き出しで、初めて具体的なイゾルデ像が、トリスタンの行う教育との関連において明らかにされる。

「この美しい人は、そのダブリンの言葉に加え、フランス語もラテン語もできたし、まことに見事にフランス式にフィーデルをかきならすこともできた」(7984-7988)。[33] 更に、トリスタンが王女に教育した「このような事柄と共に、彼が彼女に教育したことは、われわれが礼（morâliteit）と呼ぶ事柄である」(8002-8004)[34] とゴットフリートは述べている。そしてこの morâliteit こそ「若い王女の最大の課題であって、それによって彼女はその情と知をしばしば鍛錬し、それによって彼女はよい性格となり、美しく清らかな精神の持ち主となり、彼女の振舞いは快く、立派になった」(8020-8026)[35] と説明されている。

上記の morâliteit は、8004、8008、8019行の三箇所でのみ用いられるのだが、ゴットフリートの造語であって、古フランス語の moralité、或はラテン語の moralitas が手本になっていると指摘されている。[36] この造語によって、ゴットフリートは、何を表現しよ

うとしたかについては、多くの研究者によって論じられてきたが、[37] クローンの次のような解釈は、正鵠を得たものだと筆者には思われる。

「morâliteit は、単に表面的な意味での礼儀作法教育ではない。この概念の背後には、むしろ、倫理上の完璧さと美的現象とは、必然的に相互に関連しているカテゴリーであるとする中世の信念が存在している。志操と礼節とは不可分の一体性を成しており、その一体性こそ世俗と神（werlde unde got, 8011, 8013）の隔和になっている」。[38] 言い換えれば、morâliteit は、高い倫理性と美的現象とが不可分に結合している状態を指しているのであり、トリスタンの教育によって、王女イゾルデが内面と外面の美的一致を獲得したことを示すものであろう。

これこそトリスタンの教育の規範であったことをゴットフリートは強調しようとして、この場面でのみ三回くり返し、morâliteit を用いたのだと思われる。

morâliteit、つまり内面と外面の美的一致を身につけた王女イゾルデを、「全ての人が目の保養と思い、耳の楽しみ、心の楽しみと感じた」(8048-8051)[39] とゴットフリートが述べたとき、「全ての人」の中にその王女を教育したトリスタンが当然含まれていることを、morâliteit を三回も耳にしていた聴衆が、聞き違えるはずはなかったであろう。

「この可憐な、清らかなイゾルデは、歌い、物語り、かつ書くことができ、……フィーデルを奏で、……リラやハープを弾き、……この上なく素晴らしく歌ってきかせた」(8054-8075)[40] と22行にわたって、ゴットフリートは王女イゾルデの音楽的才能を詳しく紹介する。この紹介の場面は、すでに少年期のトリスタンを詩人が物語った時、[41] マルケ王の宮廷へ初めて登場した十四歳のトリスタンの、その素晴らしい芸術家的特性が詳述されていた場面を思い起こさせる。[42] その際に、なかんずく強調されていたのが、トリスタンの音楽的才能であった。

このアイルランド航行においても、致命傷からトリスタンを救ったのは、音楽と心を一体化させたトリスタンの音楽性であった。そのトリスタンが教育した王女イゾルデに、少年トリスタンと同じように、芸術家的特性が開花していったのである。

クローンの言葉を借りれば、「主人公たちの恵まれた音楽性は、彼らを女神ミンネによって支配されるミューズたちの山の領域へと促していく。彼らの芸術家的特性は、彼らの愛の運命を予告する。彼らの特に秀でた音楽的天性は、相互の類似性の第一歩を示すもので、この類似性によって、ゴットフリートは彼らの未来の運命を前奏しているのである」。[43]

4

しかし、ゴットフリートはこの主人公たちの未来の運命を前奏しているだけでなく、も

っと明瞭に、トリスタンと王女イゾルデとの愛の芽生えを描き出していると思われるのが、次の箇所である。

「私は、この美しく天性に恵まれた人を、磁石で船を引き寄せる、あのセイレーンたち（8087 Syrênen）の一人以外に、誰と比べられようか。そういうように、イゾルデは愛の苦悩に対して自分は大丈夫と思い感じている多くの人たちを引きつけた。錨のない船と人の心、この二つともよく似ている。この二つとも、まっすぐな路を進むことはまれで、二つとも不安定な海路で上に下に、右に左に、揺れ動き、波に漂う。こうして舵取りのいない欲望、不確かな恋心は、まるで錨のない船と同じように、さまよい漂う。この礼儀正しく聡明なイゾルデ、若くて愛らしい王女は、磁石がセイレーン（8111 Syrênen）の歌で船を引き寄せるように、多くの人の心の箱から、想いをひき寄せた。彼女の歌は多くの人の心の中へ、堂々と、またひそやかに、耳を通り、目を通って入りこんだ。彼女があちら、こちらで、堂々ときかせる歌とは、彼女の愛らしい歌声と、彼女の快い弦の響きであって、それは耳という王国を通って心の中へ、堂々と音を響かせながら入りこんだ。同じように、ひそやかな歌が、つまり彼女のおどろくべき美しさが、愛の響き（8124 muotegedoene）を奏でつつ、こっそりとひそやかに、目という窓を通って、多くの気高い心の中に忍びこみ、たちまちその想いをとりこにして、恋と恋の苦しみでしばりつけてしまう魔術をかけたのであった」（8085-8131）。[44]

上記の箇所では、ゴットフリートは王女イゾルデをセイレーンに喩えて、その魅力を語っているのだが、詩人がセイレーンという女神の名を使うのは、この箇所が最初ではなかった。

ゴットフリートは、すでに「文学批評」の中で、「言葉と表現力という天賦の詩才」（4868-4869）を求めて、ヘリコンの山々に向かって祈念した際に、一度用いていた。

「私の祈りと願いを、今はじめて心をこめ、手を合わせて送り届けよう、ヘリコンの山々に向かって、あの九重にかさなり合う玉座に向かって、あそこから泉が湧き、その泉から言葉と表現力という天賦の詩才が流れでてくるのだ。あの山のあるじと、九人の女あるじたち、アポロとカメーネン（4871 Camênen）、即ち耳をあやつる九人のセイレーンたち（4872 Sirênen）は、あの山の宮殿で詩才をつかさどり、この世の人に思いのままにその恵みを分ち与え、その英知の泉の水を、こんなにもたっぷりと多くの人に与え給うのだから、私に対してもその一滴を、名誉にかけても拒むことはなさるまい」（4862-4879）。[45]

4871行で用いられているカメーネン（Camênen）は、古イタリア語で、泉の女神たちを指していたが、中世ではミューズの女神たちと同義に扱われるようになった。[46]「ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは、ミューズの女神たちとセイレーンたちの、この過激な接近を実現し、彼の同時代に対し紹介している中世唯一の詩人であるようにみえる。この点で、彼の先駆者はプラトンであった。……ゴットフリートの描くヘリコンの

山では、セイレーンたちはその二通りの意味をもつ態度を捨ててはおらず、そこでは現世的、魅惑的なセイレーン性を否定していない。むしろ、ミューズたちの天空はセイレーンたちの領域に同化している。ゴットフリートはミューズたちをカメーネンと呼ぶことによって、泉の女神たちとしての、かっての性質を想起させ、泉の女神たちと、ヴィーナスが立ちのぼってきた大海に住んでいる、あの魅惑するように歌を歌うセイレーンたちとを結びつけることを、ゴットフリートは、この女神たちで、際立たせているのである。ミューズたちの山を使って、ゴットフリートは、きらりとほのめかしながら、ヴィーナスの山をも想起させる。同時に彼は、ミューズとセイレーンの間の、個々の相違を過激に、大胆に、相殺する。ゴットフリートは、歌を歌うミューズたちとセイレーンたちとの争いには、絶対もちこませない。彼はミューズとセイレーンを統合しながら、血縁づけている」[47] とグネディンガーは説明している。

この説明によって明らかなように、ゴットフリートは、「文学批評」における4872行で、Sirênen という語を用いた時、ミューズからヴィーナスまでをも統合しようとする大胆な意図をもって、この語を用いたと考えてよかろう。

5

その Syênen という語が、今また王女イゾルデの比喩として、8087行、8111行の二度にわたり用いられている。ゴットフリートの『トリスタン』では、この三回しか、この語は用いられないのだが、クローンは、4872行のセイレーンと、8087行、8111行のセイレーンは異なる意味をもつと解釈する。[48]

しかしながら、筆者は、グネディンガーの解釈を踏まえて、「文学批評」での、ミューズとセイレーンの大胆な総合が、今再び、王女イゾルデの比喩に甦ったと考えたい。また、すでに見てきたように、このタントリス・エピソードを語っているゴットフリートの意識下には、「文学批評」で繰りひろげた彼の思いが流れていたことを考えれば、この三回のセイレーンの使用は、同じ意図から出ていると考えてもよいのではなかろうか。

グネディンガーも、先に引用した8085行から8131行のイゾルデ描写について、次のような解釈を与えている。「彼女はヘリコンの山の、正真正銘のセイレーンである。セイレーン性のもつ避けがたい危険と魅力は、イゾルデの音楽によって効果を発揮する。この音楽の浸透性は、そもそもイゾルデの美しさと音楽との同一視から生まれている。イゾルデの魅力的な、うっとりとさせる美しさは、またその危険性と過激さも、文化と教養の光の中で、特に音楽という媒体の中で、そもそもはじめて明らかになるのであって、トリスタンの魅力と同じく、驚嘆の域に達している。イゾルデの美しさは、いわば彼女の音楽の視覚的現象であり、視覚的表現なのであって、彼女の音楽によって、彼女は女神ミンネの国を、

漂い憧れるような気分で、想い浮かばせるのである」。[49]

言い換えれば、ゴットフリートはセイレーンの比喩を用いることによって、イゾルデの美しさと彼女の音楽との同一性を、聴衆に理解させることに成功したと言えよう。

また、シンデレ（Gerhard Schindele）は、「大胆な、ゴットフリートの意図をきわめてよく表現している造語、愛の響き(8124 muotgedoene)」に注目して、「音楽という最も精神的な材料が、ミンネのとりこの中では内面の執行機関であることが明らかにされている[50]」と指摘している。

このように、セイレーンの比喩には、イゾルデの美しさと音楽、音楽とミンネの表裏一体の関係を表現しようとしたゴットフリートの意図がこめられていたといってよかろう。

シンデレは、更に、トリスタンが、一人小舟に身を横たえ、ダブリン沖で漂っていた場面を、このセイレーンの比喩の中で錨のない舟と恋心が比べられる時に、連想しうるのではないかと考えている。[51] ただ、ゴットフリートは、セイレーンに引き寄せられる多くの人の中に、トリスタンの名前をはっきりとあげはしなかった。「媚薬を飲む場面の前に、はっきりとした言葉に出すことを、古い寓話のもっている、相も変らない強い影響力が禁じた。これを避けて、ゴットフリートは主観的観点と客観的観点との間にけりをつけない関係をつくり上げた。つまり、イゾルデによって引きつけられるのは、耳を傾ける人たちの心（muot）であるということに、物語のコンテクストではなるのだが、やはりまず第一は、トリスタンの心（muot）なのだということが、場面の写し出す客観的関係によって表されている」[52] というシンデレの解釈に、筆者は全面的に同意したい。

ゴットフリートは、セイレーンの比喩の場面（上記8085行から8131行）ではトリスタンの名前を直接あげることはなかった。しかし、その直後（8132行）から、次のように語っていることに、注目しなければならないと思う。「こうして美しいイゾルデはトリスタンの教えによって、ますますみがかれた。彼女はやさしい気立てと、立派な礼儀作法と態度、物腰を身につけた。彼女は美しい弦の演奏ができ、沢山の素晴らしい技をもっていた。歌の詞や曲をつくったり、彼女の詩を美しく練り上げたり、書いたり、読んだりできた」(8132-8141)。[53]

ここで（8133行）、トリスタンの名前をはっきりとあげて、詩人はセイレーンに喩えるべきイゾルデを教育したのはトリスタンであったことを、聴衆に再確認させている。この再確認によって、美しいイゾルデと音楽、音楽とミンネの一体化を育て上げた人はトリスタンであって、トリスタンと王女イゾルデの運命的なミンネが始まったことを、ゴットフリートが聴き手に告げているのだと思われる。

ランガー（Otto Langer）は、「セイレーンの比喩によって、美と音楽と愛と死の一体性が暗示され、それは媚薬の後に明らかになる」として「筋書きのこの段階では、トリスタン自身も、オデュッセイアのように振る舞っている。つまり、moraliteit というマスト

にしっかりと身をしばっていて、幸せに酔わせる誘惑者の歌が彼を誘惑することはない」[54]と述べている。しかしながら、morâliteit というゴットフリートの造語は、すでにみたように、内面と外面の美的一致を目指して、トリスタンが王女イゾルデを教育しようとした規範であったと考えられ、オデュッセイアがマストに身をしばりつけて、セイレーンの歌声の誘惑に打ち勝った際の、あのマストと比すべきものではなかろう。

また、トリスタンの教育によって、セイレーンに喩えるべき王女イゾルデが育っていったというゴットフリートの再確認こそ、「筋書きのこの段階で」、すでに王女イゾルデとトリスタンの間に、音楽を媒体としたミンネが生まれている証左ではなかっただろうか。

トリスタンとイゾルデの間の愛の始まりがいつであるか、媚薬を飲む以前か、以後か、多くの研究者によって論じられてきた問題である。その問題に対して、タントリス・エピソードに出てくるセイレーンの比喩は、一つの解答を与えてくれているように思われる。

「今やトリスタンはいつも、この宮廷の家臣やこの国の誰かが、彼のことをかぎつけるのではないかと恐れた。どういううまい口実で暇がもらえ、この不安から逃れられるものか、常に考えていた」(8146-8152)。[55] 彼はうまい口実をもうけて、再びコーンウォールへと帰国することに成功するのであるが、彼にとって、タントリスという仮の姿で、アイルランド宮廷に長居のできないことは自明のことであった。このようなタントリスという仮の姿で、王女イゾルデに対して抱くミンネは、セイレーンの歌に引き寄せられる多くの人の一人という姿で、留めておかなければならなかった。そのことを暗示するために、ゴットフリートはセイレーンの比喩の中では、トリスタンの名前を明らかにすることを、あえて避けたのであろうと考えられる。

注

1）『相愛大学研究論集』第5巻（通巻第36巻），拙稿参照。

2）6944-6947

arzat noch arzate list
6945 ernert dich niemer dirre not,
ezn tuo min swester eine, Isot,
diu künegin von Irlande:

引用は Gottfried Weber: Gottfried von Tristan. Text, Nacherzählung, Wort-und Begriffserklärungen. 1967. による。

3）7259

die allerbesten die man vant.

4）Hans Furstner: Der Beginn der Liebe bei Tristan und Isolde in Gottfrieds Epos. In: Neophilologus 41 (1957). S. 38.

5）7303–7306

sit ez sin tot doch wære,
so wære im also mære
7305 der lip gewaget oder tot
als disiu totliche not.

6）7317

diz geviel im übele unde wol.

7）7327–7331

wie manz verswigen solte,
daz er zIranden wolte;
wie man solte sagen mære,
7330 daz er in Salerne wære
durch sines libes genist.

8）Eilhart von Oberge. Hrsg. v. FRANZ LICHTENSTEIN. 1973. S. 68ff.

9）ベディエ編『トリスタン・イズー物語』岩波文庫　26頁以下

10）Lambertus Okken: Kommentar zum Tristan–Roman Gottfrieds von Strassburg. 1. Band. 1984. S. 347.

11）7513–7523

nu si begunden nahen
und dannoch nieman sahen,
7515 nu gehortens al dort her
suoze unde nach ir herzen ger
eine süeze harpfen clingen
und mit der harpfen singen
einen man so rehte suoze,
7520 daz siz in zeime gruoze
und ze aventiure namen
und von der stat nie kamen,
die wile er harpfete unde sanc.

12）Louise Gnaedinger: Musik und Minne im»Tristan«Gottfrieds von Strassburg. (Beihefte zur Zeitschrift »Wirkendes Wort« 19). 1967. S. 55.

13）トマの翻案として、1226年古ノルウェー語で書かれた。

14）L. Gnaedinger: ibid. S. 55.

15）7524–7536

diu vröude diu was aber unlanc,
7525 die si von im hæten an der stete,
wan swaz er in da spiles getete
mit handen oder mit munde,
dazn gie niht von grunde:
daz herze dazn was niht dermite.
7530 son ist ez ouch niht spiles site,

daz manz dekeine wile tuo,
daz herze daz enste darzuo;
al eine geschehe es harte vil,
ezn heizet doch niht rehte spil,
7535 daz man sus uzen hin getuot
ane herze und ane muot.

16) 7541
ez was dem marteraere

17)『相愛女子大学・女子短期大学研究論集』第27巻（音楽学部編），拙稿参照。

18) 7560–7562
7560 'ich was ein höfscher spilman
und kunde genuoge
höfscheit unde vuoge:

19) 7606
und helfet mir, dâ liute sîn!

20) Klaus Speckenbach: Studien zum Begriff 'edelez herze' im Tristan Gottfrieds von Strassburg. 1965. S. 41.

21) dito.

22) 7665–7677
7665 sus batens in, er harpfet in;
und er kert allen sinen sin
an ir gebot und an ir bete,
wan erz von allem herzen tete:
swa mite er sich in kunde
7670 mit handen oder mit munde
gelieben, daz was al sin ger,
des vleiz er sich und daz tet er.
und alse der arme spilman
wider sines libes state began
7675 sin harpfen und sin singen
so rehte suoze bringen,
ez begundes alle erbarmen:

23) 7708–7709
der was der küniginne
meister unde gesinde

24) 7715–7727
7715 ouch lerter ie genote
ir tohter Isote,
die erwünscheten maget,
von der diu werlt elliu saget
und von der disiu mære sint:

7720 diu was ir einegez kint,
und hæte alle ir vlizekeit
sit des tages an si geleit,
dazs iht gelernen kunde
mit handen oder mit munde:
7725 die hæte er ouch in siner pflege;
die lerter do und alle wege
beidiu buoch und seitspil.

25) Wilfried Wagner: Die Gestalt der jungen Isolde in Gottfrieds Tristan. In: Euphorion 67 (1973). S. 52.

26) 7809–7832
sus wart sin harpfe dar besant.
7810 ouch besande man zehant
die jungen küniginne.
daz ware insigel der minne,
mit dem sin herze sider wart
versigelt unde vor verspart
7815 aller der werlt gemeiner
niuwan ir al einer,
diu schœne Isot si kam ouch dar
und nam vil vlizecliche war,
da Tristan harpfende saz.
7820 nu harpfeter ouch michel baz,
dan er ie da vor geræte:
wan er gedingen hæte,
sin ungelücke wære hin,
da sanger unde harphet in
7825 niht alse ein lebeloser man,
er vieng ez lebelichen an
und alse der wol gemuote tuot.
er machetez in so rehte guot
mit handen und mit munde,
7830 daz er in der kurzen stunde
ir aller hulde also gevienc,
daz ez im zallem guote ergienc.

27) 7935–7961
7935 Ob ich iu nu seite
und lange rede vür leite
von miner vrouwen meisterschaft,
wie wunderliche guote craft
ir arzenie hæte

7940 und wies ir siechen tæte,
waz hülfez und waz solte daz?
in edelen oren lutet baz
ein wort, daz schone gezimt,
dan daz man uz der bühsen nimt.
7945 als verre als ichz bedenken kan,
so sol ich mich bewarn dar an,
daz ich iu iemer wort gesage,
daz iuwern oren missehage
und iuwerm herzen widerste.
7950 ich spriche ouch deste minner e
von iegelicher sache,
e ich iu daz mære mache
unlidic unde unsenfte bi
mit rede, diu niht des hoves si.
7955 umb miner vrouwen arzatlist
und umbe ir siechen genist
wil ich iu kurzliche sagen:
si half im inner zweinzec tagen,
daz man in allenthalben leit
7960 und nieman durch die wunden meit,
der anders bi im wolte sin.

28) Gottfried von Strassburg, Tristan. Nach dem Text von F. Ranke neu hrsg, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von RÜDIGER KROHN. Band 3. 1981. S. 91.

29) dito.

30)『相愛大学・女子短期大学研究論集』第30巻（音楽学部編），拙稿参照。

31) 4681–4682
ir rede ist niht also gevar,
daz edele herze iht lache dar.

32) 7962–7963
sit gie diu junge künigin
alle zit siner lere:

33) 7984–7988
diu schœne si kunde
7985 ir sprache da von Develin,
si kunde franzois und latin,
videlen wol ze prise
in welhischer wise.

34) 8002–8004
under aller dirre lere

gab er ir eine unmüezekeit,
die heizen wir moraliteit.

35) 8020–8026

8020 diz was ir meiste unmüezekeit
der jungen küniginne.
hie baneketes ir sinne
und ir gedanke dicke mite.
hie von so wart si wol gesite,
8025 schone unde reine gemuot,
ir gebærde süeze unde guot.

36) Gottfried von Straßburg: Tristan. Deutsche Klassiker des Mittelaters. Neue Folge Band 4. Erster Teil. 1978. S. 352.

37) Reiner Dietz: Der 'Tristan' Gottfrieds von Straßburg. Probleme der Forschung (1902–1970). 1974. S. 82ff.

38) R. Krohn: ibid. S. 92

39) 8048–8051

arme unde riche
si hæten an ir beide
8050 eine sælige ougenweide,
der oren unde des herzen lust:

40) 8054…8075

diu süeze Isot, diu reine
8055 si sang in, schreip und si las;
und swaz ir aller vröude was,
daz was ir banekie.
si videlt ir stampenie,
leiche und so vremediu notelin,
8060 diu niemer vremeder kunden sin,
in franzoiser wise
von Sanze und San Dinise:
der kundes uzer maze vil.
ir liren unde ir harpfenspil
8065 sluoc si ze beiden wenden
mit harmblanken henden
ze lobelichem prise.
in Lut noch in Thamise
gesluogen vrouwen hende nie
8070 seiten süezer danne hie
la duze Isot, la bele.
si sang ir pasturele,
ir rotruwange und ir rundate,

schanzune, refloit und folate
8075 wol unde wol und alze wol:

41) 上記17) と同じ拙稿参照。

42) R. Krohn: ibid. S. 95.

43) dito.

44) 8085–8131

8085 Wem mag ich si gelichen
die schœnen, sælderichen
wan den Syrenen eine,
die mit dem agesteine
die kiele ziehent ze sich?
8090 als zoch Isot, so dunket mich,
vil herzen unde gedanken in,
die doch vil sicher wanden sin
von senedem ungemache.
ouch sint die zwo sache,
8095 kiel ane anker unde muot,
zebenmazene guot:
si sint so selten beide
an stæter wegeweide,
so dicke in ungewisser habe,
8100 wankende beidiu an und abe,
ündende hin unde her.
sus swebet diu wiselose ger,
der ungewisse minnen muot,
reht als daz schif ane anker tuot
8105 in ebengelicher wise.
diu gevüege Isot, diu wise,
diu junge süeze künigin
also zoch si gedanken in
uz maneges herzen arken,
8110 als der agestein die barken
mit der Syrenen sange tuot.
si sanc in maneges herzen muot
offenlichen unde tougen
durch oren und durch ougen.
8115 ir sanc, dens offenliche tete
beide anderswa und an der stete,
daz was ir süeze singen,
ir senftez seiten clingen,
daz lute und offenliche

8120 durch der oren künicriche
hin nider in diu herzen clanc.
so was der tougenliche sanc
ir wunderlichiu schœne,
diu mit ir muotgedœne
8125 verholne unde tougen
durch diu venster der ougen
in vil manic edele herze sleich
und daz zouber dar in streich,
daz die gedanke zehant
8130 vienc unde vahende bant
mit sene und mit seneder not.

45) 4862–4879
mine vlehe und mine bete
die wil ich erste senden
mit herzen und mit henden
4865 hin wider Elicone
ze dem niunvalten trone,
von dem die brunnen diezent,
uz den die gabe vliezent
der worte unde der sinne.
4870 der wirt, die niun wirtinne,
Apolle und die Camenen,
der oren niun Sirenen,
die da ze hove der gaben pflegent,
ir genade teilent unde wegent,
4875 als sir der werlde gunnen,
die gebent ir sinne brunnen
so vollecliche manegem man,
daz si mir einen trahen da van
mit eren niemer mugen versagen.

46) R. Krohn: ibid. S. 71.

47) L. Gnaedinger: ibid. S. 16f.

48) R. Krohn: ibid. S. 71.

49) L. Gnaedinger: ibid. S. 68f.

50) Gerhard Schindele: Tristan. Metamorphose und Tradition. 1971. S. 44.

51) dito. S. 43.

52) dito.

53) 8132–8141
Sus hæte sich diu schœne Isot
von Tristandes lere

gebezzeret sere.
8135 si was suoze gemuot,
ir site und ir gebærde guot;
si kunde schœniu hantspil,
schœner behendekeite vil:
brieve und schanzune tihten,
8140 ir getihte schone slihten,
si kunde schriben unde lesen.

54) Otto Langer: Der ‚Künstlerroman' Gottfrieds — Protest bürgerlicher ‚Empfindsamkeit' gegen höfisches ‚Tugendsystem'? In: Euphorion 68 (1974). S. 21.

55) 8146–8152
nu vorhter alle stunde,
daz in eteswer erkande
von gesinde oder von lande,
und was in stæter trahte,
8150 mit wie gevüeger ahte
er urloup genæme
und uz den sorgen kæme;

参考文献

Gottfried von Straßburg: Tristan und Isolde. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen und erläutert von Günter Kramer. (Venlag der Nation 1970.)

Gottfried von Stassburg: Tristan. Translated entire for the first time. (Penguin Books 1972.)

Gottfried von Straßburg: Tristan. Hrsg. von Karl Marold. (Walter de Gruyter 1977.)

Gottfried von Straßburg: Tristan. Übersetzt von Xenja von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel. (W. Fink Verlag 1979.)

Gottfried von Stassburg: Tristan und Isold. Nach der Übertragung von Hermann Kurtz bearbeitet von Wolfgang Mohr. (Kümmerle Verlag 1979.)

『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳　郁文堂　1987.